

第二幕

登場人物…

マーニ

月の娘

牝牛

ディッシュユ

スプーン

第一幕から夜が更け、真夜中。

ヴァイオリンの音が聞こえている。

BGMをヴァイオリンの独奏にしても良し。

月の馬車が夜空を駆けている。

何処かのタイミングで梟の鳴き声がほうほう。

それを聞き、呼応するようにマーニがぼそりと歌う。

マーニ

「♪H<sup>へ</sup>e<sup>イ</sup>y, D<sup>デ</sup>i<sup>イ</sup>d<sup>ド</sup>d<sup>ド</sup>l<sup>ウル</sup>e D<sup>デ</sup>i<sup>イ</sup>d<sup>ド</sup>d<sup>ド</sup>l<sup>ウル</sup>e」

更にマーニの歌に合わせて月の娘が歌う。

月の娘

「♪H<sup>ハ</sup>a<sup>アイ</sup>i, D<sup>デ</sup>i<sup>イ</sup>d<sup>ド</sup>d<sup>ド</sup>l<sup>ウル</sup>e D<sup>デ</sup>i<sup>イ</sup>d<sup>ド</sup>d<sup>ド</sup>l<sup>ウル</sup>e」

マーニ

「おっと、危ない」

馬車が急に飛び出してきた牝牛を避ける。

牝牛は馬車を飛び越して走り去っていく。

何処かで子犬の笑い声。

一旦馬車を止めてバギーの方を振り返り。

マーニ

「すみません、お怪我はありませんか」

月の娘に接する時だけは口調を丁寧に、柔らかく。

ウィリーや牝牛に対する時とはギャップをつけて。

月の娘

「私は平気よ、吃驚して少し欠けてしまったけれど。

それより、貴方の方こそ大丈夫？」

マーニ

「何て事ありません」

さらっと言った後、御者台から乗り出して叫ぶ。

マーニ

「おいこら、牝牛！ 人の上を飛び越えるなら、せめて一鳴きくらいしてからにしろ。  
ホーリイカウ  
何度言わせる、h o l y c o w」

『holy cow』= holy shitの控え目な言い方、スラング。  
holy shit自体は『なんてこった』というような罵り語。  
牝牛は月を飛び越した後スピードを落とし、  
Uターンしてゆっくりと近付いてくる。

牝牛

「あら失礼、マーニ。でもお月様の付き人とも  
あろう人がそんなスラング口にして良いのかしら？」

からかうようににやにやと。

マーニ

「Sh u t u p」  
おお怖い、というように首を竦める牝牛。

本気で怖いと思っているのではなく、誇張した様子で。

牝牛

「あたしゃ一度だってあなたの馬や馬車を  
踏んづけたりした事なんてないのにねえ。

ごめんねえ、驚かせちゃった？」

バギーの方に回り込んでにっこり挨拶。

月の娘

「御機嫌よう、牝牛さん。ええ、とてもどつきり。  
でも、平気」

柔らかく微笑する月の娘。

牝牛

「そりゃ何よりだ。  
知ってるだろうけど、この季節はどうもね。

あんた達を見ると飛び越えたくてうずうずするの。

♪猫はフィドルを弾き鳴らし、「

月の娘

「♪牝牛は月を飛び越して？」

牝牛

「♪それ見て小犬は大笑い！」

牝牛と月の娘は互いに顔を見合わせながら悪戯っぽく。

それに続けて何処からか声がする。

ドイツシュ

「♪そうして私とスプーンは」

スプーン

「♪逃げ出し、駆け出し、駆け落ちさ」

高らかに歌った後、少し早口で囁き合うように。

ディッシュ 「♪愛してるわ、スプーン」

スプーン 「♪僕もだよ、ディッシュ」

すぐ傍の物陰から立ち上がるディッシュとスプーン。  
手をしっかりと繋ぎ合っている。

ディッシュは少し疲れ気味、軽く肩で息をしている。  
間髪を入れずマーニがうんざりしたように。

マーニ 「〈低い溜息〉」

馬車の近くの物陰は、よく見ると荷物の山。

ディッシュとスプーンが駆け落ちのために持ってきた。

マーニ 「やれ、道を空けてくれ。」

こちらと走り続けにやならないっていうのに。

何だその荷物は、道を塞いでくれてるんじゃないぞ。

ほら、どけたどけた」

スプーン 「これはすまない、月の御者マーニ。」

だけど彼女を見てよほら、息も絶え絶え」

ディッシュ 「走り詰めなの、ごめんなさいね」

スプーン 「少し休ませてあげとくれ。」

それか君がその立派な馬車の上から降りてきて、  
僕らが荷物をどけるのを

手伝ってくれるわけじゃあなきやね」

やっぱりこうなるのか、という風に。

マーニ 「〈諦めたような溜息〉」

月の娘 「まあまあ、マーニ。」

私達の馬にも休憩があっても良いんじゃないやなくて？

ここは高い夜空の天辺。<sup>てっぺん</sup>

ハテイが来てもすぐに分かるわ」

マーニ 「……貴女がそう仰るのなら、御意に」

渋々そう言いつつ、マーニは話の輪から外れる。

御者台でハテイの姿が見えないか見張り番。

月の娘 「お二人はところで何処からいらしたの？」

スプーン 「立派なネズの木が見える台所からさ」

ディッシュ 「遠く、遠くへ行かなきゃならないの」

スプーン 「おかみさんに連れ戻されるその前に」

月の娘と牝牛が顔を見合わせる。

牝牛 「いったいどういう事情さ？」

スプーン 「話せば長くもならないけれど。」

僕らのおかみさんはとっても酷いお人だもんで。

彼女も僕も、汚れ放題、錆び放題。

なのに碌ろくに洗ってくれもせず。

ぞんざい！ がさつ！

食器を食器とも思っちゃいない！

誰のおかげで熱々スープを啜れるかも知らないで」

恨み辛みを切々と説くスプーン。

思い出しても腹立たしい、というようにヒートアップ。

ぽつり、息を整えたディッシュが憂鬱そうに呟く。

ディッシュ 「……あの人にこき使われるのはもう沢山」

ディッシュの呟きで怒りをころっと放り出すスプーン。

慰めるように寄り添い、優しく頬に手を当てる。

ディッシュは泥まみれで深く消沈しており、

スプーンも汚れているが恋人のために努めて元気を装う。

スプーン 「可哀想なディッシュ、体中ソースまみれで」

ディッシュ 「自慢の肌も醜い muddy。」

お鼻も欠けてずんぐりむっくり獅子ししつ鼻びな」

スプーン 「大丈夫、きつとまた元通りになるさ！

誰もが振り向く白皙はくせきの、鼻筋も通った麗しの君にね。

欠けたお鼻もほら、ちゃんと僕が持ってきた。

後で粘土をこねて引っ付けよう？」

ディッシュ 「でももしも、この汚れが体の芯まで染み付いてたら？

貴方は私を嫌いになるわ」

悲劇のヒロインのように悲観的に。

この二人は自分達の世界にめり込んでいくタイプ。

とはいえ、あまり誇張しすぎてギャグにならない程度に。

スプーン 「なるわけないさ、可愛いドイツシュ」

ドイツシュ 「そんなの嘘よ」

スプーン 「嘘じゃないさ、愛しいドイツシュ。

しやくとりむし

僕が折れてひしゃげて尺取虫みたくなつたとしても、

君は僕を変わず愛してくれるだろう？

だから、僕も同じだよ」

置いてけぼりのギャラリィ。

このままでは收拾がつかないと釘を刺しにくるマーニ。

マーニ 「（小さく咳払い）」

ドイツシュ 「嗚呼、勿論よ。」

ごめんなさいね、マイ・ディア・スプーン！

貴方の心を疑うつもりなんてなかったの」

スプーン 「知っているとも、マイ・ディア・ドイツシュ。

君はちよつと」

マーニ 「（咳払い）」

スプーン 「疲れているだけなんだ、無理もない」

君はちよつとく疲れては一つの台詞。

台詞の最中に咳払いが入るイメージで。

マーニ 「（大きく咳払い）」

月の娘 「（合わせて小さく咳払い）」

のろけ

マーニは露骨に話の脱線と惚気を咎めている。

たしな

その露骨さを少し嗜めつつ、マーニ同様に

話を元に戻すべく月の娘の咳払いが入る。

スプーン 「おっと、ごめんよ。話が逸れてしまったね。

まあ、そんな仕打ちに堪えられなくて。

僕らは二人で逃げてきたのさ」

牝牛 「それはまあ、お気の毒」

スプーン 「旦那様の気がしれないよ。

前のおかみさんはとっても器量の良い人で、  
僕らも毎日つるつる、ぴっかぴか、  
綺麗に磨いてもらえたものさ」

ドイツシユ 「だけど前のおかみさんは、くしゃみをしたと  
思ったら呆気なくころりと死んじゃった」

スプーン 「恐ろしいバラの花輪の呪いだよ」

ドイツシユ 「♪ Ring-a-Ring-o', Roses」  
ローゼス

呪文のようにおいて厳かに呟く。

『Ring-a-Ring-o' Roses』という遊戯歌より。

ペストの流行を暗喩した、実は怖い歌。

その響きにつられるように口々に繰り返す。

月の娘 「♪ Ring-a-Ring-o', Roses」  
リングアリングオーローゼス

牝牛 「♪ Ring-a-Ring-o', Roses」  
リングアリングオーローゼス

マーニ 「駄目です、駄目です、いけません」

月の娘がはつとして首を振る。

月の娘 「恐ろしい呪文、いけないわ」

牝牛 「あたしまで、ついつられちゃった」

気まずい空気の中でドイツシユが切り出す。

ドイツシユ 「この駆け落ちに心残りがあるとしたら」

たっぷり間をとって。

スプーン 「前のおかみさんの、忘れ形見」

ドイツシユ 「ロビンの坊やがいじめられていないかだけが、

私とっても……気になるわ」

ヴァイオリンの音に紛れてハテイの遠吠え。

何となく不吉な感じに尾を引く。

遠吠えが聞こえてくると入れ代わりに

BGMがフェードアウトし最後は一瞬静寂の間を残す。

解説..

『Hey, Diddle Diddle』という

有名なナンセンス歌にちなむ。

猫がフィドル、ヴァイオリンを弾き、

牝牛が月を飛び越え、それを見た仔犬が大笑いし、

皿と匙が駆け落ちするという、一見意味のない歌。

猫は獅子座、フィドルは琴座、牛は牡牛座、

仔犬は小犬座、スプーンは北斗七星、皿はコップ座を

それぞれ暗示しているという説がある。

なお、これらが夜空に一堂に会するのは四月のみ。